

European
Living in
Japan

Estonia's Great Sumo Hope

裸一貫の勝負に魅せられた
エストニア人力士

「兄に負けたくない」——その一心で始めた柔道がきっかけで、把瑠都関は19歳で母国エストニアを離れ、日本の相撲界に入った。197cm、172kgという恵まれた体格を生かし、初土俵から4年半で大相撲の三役である関脇に昇進。今や人気と実力で、ブルガリア出身の大関・琴欧洲関とともに、幕内に“東欧”勢力を築くまでに至った。

2008年10月、世界相撲選手権がエストニアの首都タリンから東に100キロほどのラクヴェレ県で行われた。人口1万7,000人の小さな県で世界大会開催が実現したのは、地元出身の力士、把瑠都関（本名カイド・ホーヴェルソン）の人気に負うところが大きい。

元来スポーツが盛んなエストニアだが、人口130万人の小国なので、行われているスポーツ種目の数は多くない。その中でも柔道はたくさんの人に親しまれてきた。カイド少年も、高校1年の時に、それまでやっていたバスケットをやめ、柔道を始めた。「柔道をやっている兄に負けたくないと思った」というのがその理由だ。

だがその時に柔道を教えたのがエストニアの「相撲の父」と呼ばれる同国相撲連盟のリホ・ランニックマー氏だった。相撲の指導を受けるようになったカイド少年は、ほどなく全国アマチュア相撲大会に出場。そこで日本から来ていた相撲関係者の目に留まり、角界に「スカウト」された。

日本に行くという決断は難しくな



(財)日本相撲協会

把瑠都 凱斗

(ばると かいと)

本名 カイド・ホーヴェルソン Kaido Höövelson

大相撲力士

1984年11月5日生まれ。エストニア共和国ラクヴェレ県出身。2004年に来日、同年5月場所で初土俵を踏む。2006年5月場所で大幕。最高位は関脇（2008年11月場所）。十両優勝3回、幕下・序二段・序ノ口優勝各1回、敢闘賞受賞3回。尾上部屋所属。

かったと言う。「なんとかなる、思ってた。母は当然心配したけれど、最後は『仕方がない』と送り出してくれた」

2004年に来日し、日本大学相撲部で1カ月半、国技としての相撲の基礎を教わった。その後、尾上親方（元小結・濱ノ嶋関）の内弟子として三保ヶ関部屋に所属し、母国が臨むバルト海と本名を組み合わせた「把瑠都 凱斗（ばると かいと）」という四股名（しこな）をもらった。

● 葛藤を乗り越えて

外国人力士にとって角界の独特の風習やしきたり、言語や食事の違いは大きなハンディだ。ロシア語、英語、ドイツ語、フランス語の4言語を話す語

学の達人ともいえる把瑠都関だが、日本語は日本大学相撲部でカタコトの英語を交えて話してもらうことから徐々に身につけていった。実は四股名も、最初は意味がわからなかった。「でも、後から知って、すごくいい名前だなと思った」

「ちゃんこ」と呼ばれる食べ物も口に合わなかった。「昼もちゃんこ、夜もちゃんこ。鍋だけじゃないよ。魚や

参考 相撲の番付





“相撲の一番面白いのは、まるで車が正面衝突するように、力士が全身でぶつかって勝負するところ。自分は、毎回その瞬間にドキドキする。海外でも人気が高いので、絶対にもっと国際的なスポーツになるはず”

肉を焼いても、何でもちゃんこって呼ぶ。でも、食べなければ身体がもたないから、無理やり食べた」

19歳の若者の胸の内には相当な葛藤があったことだろう。「最初はエストニアに帰りたいと思った。一番早く起きて、掃除してけいこしてちゃんこを作って、一番遅く寝るのはつらかった。でも、慣れたら当たり前のことと思えた。結局は壁を乗り越えるまでの心の持ちようの問題」

把瑠都関と一緒にエストニアから来日した力士は、入門後まもなく帰国してしまった。「彼がどうして帰ったかは知らないけれど、すべては本人が決めること。自分は、せっかくなのでここまで来たんだから、と我慢した」

● ケガを克服して昇進続ける

把瑠都関の大相撲での活躍には目を見張るものがあった。2004年5月場所で初土俵、翌年7月場所でも新十両に昇進。初土俵から8場所での昇進は史上3位タイ(当時)のスピード出世だった。次の場所で史上最速の新入幕か、と期待されたが、初日に急性虫垂炎となり全休で幕下に転落した。しかし、十両復帰後、2006年3月場所でも史上4人目となる十両全勝優勝、史上2位タイとなる所要12場所での新入幕を果たした。

快進撃は続き、2006年5月場所でも敢闘賞を受賞。三賞受賞は、琴欧洲関と並ぶ史上最速だった。同場所千秋楽では新入幕ながら三役揃い踏み*の栄誉に輝き、所要13場所目の揃い踏み

はそれまでの琴欧洲関の最短記録を塗り替えた。

しかし、三役昇進が期待された同年9月場所でも膝を痛め、途中休場。翌2007年1月場所でも負傷、7月場所でも再び膝を痛め、休場が重なった。当時について把瑠都関は「休場続きで悔しかった。休んでいる間中、早く治して土俵に戻りたい、という気持ちでいっぱいだった」と振り返る。

しかし、2007年9月場所でも三度目の十両優勝、翌11月場所でも再入幕して敢闘賞受賞、2008年9月場所でも三役昇進とトントン拍子に進み、同年11月場所では関脇に昇進した。今は「とにかくこの調子で、大関、そして横綱、という目標のために頑張っていきたい。そのためには、土俵に上がって、いい相撲をとるだけ」と思っている。

● 目標達成まではネバー・ギブアップ

現在、把瑠都関は、おとし三保ヶ関部屋から独立した尾上親方の部屋に属している。尾上部屋は把瑠都関を筆

頭に9名の力士を擁す、比較的こじんまりした部屋だ。けいこ場では怒号が鳴り響くこともなく、淡々と、しかし熱気に満ちたけいこが進行する。「ここは若い部屋。まだ完璧に仕上がってなくて、皆で作っている」と把瑠都関が評するだけあって、38歳の若い親方を中心に力士たちが一生懸命になっている。把瑠都関は部屋頭として、流暢な日本語で後輩たちの面倒も見る。

相撲以外にも、把瑠都関はエストニアの駐日親善大使の肩書きを持つが、相撲一筋で、活動する時間がない。実は、日本への関心も今のところ相撲だけだ。海が好きで、時間があれば釣りに行く。一番好きな食べ物は、大トロだ。ジープなどのアウトドア車にも興味があるが、こちらも眺めるだけで、運転はしない。

最大の目標は、大関への昇進、そしてその先の綱取りである。「早くそうなるよう、頑張っていきたい。(勝たなければいけないというプレッシャーによる)ストレスはない。自分の相撲をとって、勝てば気持ちよくなれる。それに、勝っても勉強、負けても勉強。自分は、そう簡単にはあきらめない。横綱になるまではネバー・ギブアップです」と語るその口調には心身の充実ぶりがあふれていた。 

* 大相撲千秋楽で、結びの3番に出る力士6名が土俵に上がって四股を踏む儀式。新入幕でその立場を担うのは珍しいが、把瑠都関は成績が良かったので上の力士と対戦することができた。